

平子達也

ttyhrk43@gmail.com

1 はじめに

1.1 本発表の目的と概要

本発表の目的は、島根県東部の出雲地域で話される出雲諸方言の一つ、島根県仁多郡奥出雲町旧仁多町方言（仁多方言）における母音をめぐる音変化について、比較歴史言語学的観点から考察した結果を示すことにある。また、出雲方言の音韻体系に関する共時・通時両面からの精密な記述が、日琉諸方言を対象とする比較歴史言語学的研究に貢献し得ることを示す。

まず、仁多方言と今回扱うデータについて述べる【本節後半】。その後、仁多方言において（1）（歯茎阻害音の後で）*i と *u が中舌母音化したことを示す【2 節】。次に、上代語（8c 頃）に始まる古代中央方言（以下、単に古代語）との比較から仁多方言で（2）特定の条件下で *i > e, *u > o という変化が起こったことを示す【3 節】。さらに（3）出雲方言に広く認められる *(C)Vri/u > (C)VV という変化に関連して（C は子音、V は母音を表す。以下同じ）、仁多方言で *Ciri/u > Cja:, *Curi/u > C(w)a: などの他の出雲方言にはない変化が起こったことを示す【4 節】。そして、これら 3 つの音変化の相対年代について考察した上で【5 節】、古代語との対応からは例外となる仁多方言の kuso:「糞」という形式について、琉球諸方言等との比較から、そこに含まれる母音 o が日本祖語に遡りうるものであることを論ずる【6 節】。最後に、今後の課題と展望を簡単に述べる【7 節】。

1.2 出雲仁多方言と今回扱うデータについて

出雲方言は、島根県東部の出雲地域で話される方言で、鳥取県西部で話される西伯方言と合わせて、雲伯方言と称される。地理的には西日本に位置しながら、コピュラの da や、「買う」など w 語幹動詞（ワ行五段動詞）における促音便形（katta）など、西日本の諸方言の特徴としては一般的ではなく、むしろ東日本の諸方言と共通するような特徴を有しており、古くからもその共時的・歴史的位置付けについて注目されてきた（廣戸 1950: 3）。

一方、出雲方言もその内部は一様ではなく、先行研究（廣戸 1950）や発表者の研究（平子 2017）によれば、出雲諸方言は大きく（1）出雲市を中心とする北西部の方言、（2）奥出雲町を中心とする南部の方言、（3）安来市を中心とする北東部の方言の 3 つに分けられる。これらは、語彙・形態・アクセントの面から考えられる分類である。但し、発表者の調査によれば、（2）奥出雲町を中心とする南部の方言は、さらに、（2a）本発表で扱う旧仁多町域の方言と（2b）旧横田町域の方言とに、分けられると考えられる。

表 1 出雲方言内部の地域差

	(1) 北西部（出雲市）	(2a) 南部（旧仁多町）	(2b) 南部（旧横田町）	(3) 北東部（安来市）
「見ない」	miran	min	min	min
「行こう」（意志）	eka	eka:	eka:	eka
「降る」	φu:	φa:	φu:	φu:
「傘」のアクセント	LH	LH	HL	HL

本発表で扱う、出雲仁多方言（以下、単に仁多方言とも）は、出雲地域の中でも南部に位置する地域で話される方言の一つである。現在は旧横田町とともに仁多郡奥出雲町となっている旧仁多町域で話される。

本発表で用いる仁多方言の資料は、奥出雲町佐白（旧仁多町佐白）にお住いの UH 氏（1925 年生、女性）の発話によるものである。UH 氏とご家族の皆様には、発表者の調査にいつも快く御協力をいただいている。記して感謝の意を表す。なお、UH 氏のご両親ともに佐白のご出身であり、UH 氏も佐白で御生まれになった後、現在に至るまで、佐白にお住まいである。

2 仁多方言の音素目録と中舌母音化

仁多方言には、共時的に以下の母音音素と子音音素が認められる。

1) 音素目録

- 母音音素 : /i, i, u, e, o, a/
- 子音音素 : /p, b; t, d; c[ts ~ tɕ], z[ɕ ~ ɕ]; s[s ~ ɕ]; k, g; h[h ~ ɸ]; m, n; r, w, j; N (いわゆる撥音) /

母音音素/i/は、/s, z, c/の後でのみ現れる。/s, c, z/以外の子音の後では/i/ (音声的には [i] でも現れる) と/u/の区別がある (「肝」/kimo/ k^himo と「雲」/kumo/ k^humo。以下、方言形は簡易音声表記で示し、ブラケットは付さない)。一方、/s, c, z/の後では/i/と/u/の区別がない。共時的には、/s, c, z/に現れる母音 i を、/u/あるいは/i/のどちらかに帰するものとする分析もあり得るが、ここでは/u/とも/i/とも異なる母音音素/i/を設定する。その理由は以下の通り。

2) 母音音素/i/を設定する理由

- 母音音素/i/に前接する子音音素/s, z, c/は、硬口蓋化を起し得る。このような前接する子音を硬口蓋化させる点において、/i/は/u/と性質を異とする。
- k^hiran 「切らない」と kja: 「切る」、okuran 「送らない」と ok^wa: 「送る」から、それらの語幹の基底形とも言うべき形は前者が/kir-/、後者が/okur-/と出来る。一方、/sir-/ 「知る」は, ɕiran ~ siran 「知らない」と sa: 「知る」である。その非過去・終止連体形 sa: 「知る」は (/s/が硬口蓋化していないという点において) /kir-/よりも/okur-/に近い。このことから、/i/は/i/とも性質を異とする。

いずれにせよ、歯茎音の後で観察される中舌母音 [i] は、歴史的には、歯茎音の後で/u/と/i/がともに中舌母音で発音されるようになり、両者の対立が失われる「中舌母音化」によって生じたと考えられる。また、/s, c, z/以外の子音の後でも、音声的には中舌母音 [i] が音素/i/の音声的实现として観察されることからして、/i/と/u/との対立は失われてはいないものの、音変化として *i > i という変化の起こったことは認められる。

3 母音の低下：古代語と仁多方言との比較から

古代語と仁多方言とを比較すると、両言語の間に表 2 のような音対応があることが分かる。

表 2 仁多方言と古代語の音対応 (1)

	古代語	仁多方言	語例 (仁多方言の形)	環境
(1)	ミ	me	mezi 「水」, mezo 「溝」, megi 「右」・・・	__ CV (V は a 以外)
(2)	ミ	mi	minan 「南」, minato 「港」, min 「耳」・・・	(1) 以外
(3)	ム	mi	mikasi 「昔」, mikago 「むかご」, minanto 「胸」・・・	__ Ca
(4)	ム	mo	mogi 「麦」, mosi 「虫」, mosime 「娘」・・・	(3) 以外
(5)	ニ	ne	nesi 「西」, nena 「蝻」, negja: 「握る」・・・	語末以外 (但し (5'))
(5')	ニ	ni	nita 「煮た」	??
(6)	ヌ	no	noki: 「温い」, noreru ~ norjae 「濡れる」・・・	語末以外 (但し (6'))
(6')	ヌ	ne	neka 「糠」	__ Ca (?)

表 2 に見られる対応から、仁多方言において、表 2 の (1)(5) と (4)(6) に示した環境で *i > e 及び *u > o という「母音の低下 (vowel lowering)」が起こったと考えられる。なお、語末においては基本的に古代語の「ミ」「ム」「ニ」「ヌ」は仁多方言の/N/に対応する (ex. kaN 「紙/髪/噛む」, kiN 「絹」, kuN 「国」。但し eno 「犬」)。 (5') と (6') は、古代語との対応からすると仁多方言において例外的な形式で現れるものである。これらについては、後で扱う。

さて、上述の *i > e 及び *u > o という 2 種類の母音の低下は、語頭でも起こったと考えられる (=表 3)。

表3 仁多方言と古代語の音対応 (2)

	古代語	仁多方言	語例 (仁多方言の形【簡易音声表記】)	環境
(7)	イ	e	eto「糸(ノ干支)」, eno「犬」, emo「芋」・・・	語頭
(8)	ウ	o	ori ~ o:「瓜」, osi「牛ノ白(ノ雄)」, omi ~ on「海ノ膿」・・・	語頭

また、古代語のウ段音節に対応する仁多方言で o を含む音節としては、bo と jo があり、古代語のイ段(甲類)音節に対応する e を含む音節としては he もある (=表4)。

表4 仁多方言と古代語の音対応 (3)

	古代語	仁多方言	語例 (仁多方言の形【簡易音声表記】)	環境
(9)	ブ	bi	momotabira「腿」, kobira「脹脛」, mabita「脛」・・・	__ Ca
(10)	ブ	bo	kobosi「拳」, k ^w a:bosi「蹠」, oboi「産湯」・・・	(9) 以外 (但し (10'))
(10')	ブ	bu	kabuto「兜」(ka ϕ utoとも?), kabu「蕪」	??
(11)	ユ	jo	jori ~ jo:「百合」, jorjae「揺れる」, jori:「緩い」・・・	# __ r
(12)	ユ	V	ϕ u:「冬」, tsi:「梅雨」	{u, i(, i, e)} __
(13)	ユ	i	i「湯」, kai「粥」, oboi「産湯」	{a, o} __ あるいは # __ #
(14)	ユ	e	eki「雪」, ezi「柚子」・・・	(11-13) 以外
(15)	ヒ	he	hesigata「菱形」, hezi「肘」, hebi「ひび」,・・・	__ Ci
(16)	ヒ	ϕ u	ϕ utotsi「一つ」, ϕ uza「膝」, ϕ u「火」・・・	(15) 以外

表2 から 4 に示した範囲においては、(1) から (16) の対応を示すものについて、少数の例外を含みながらも、古代語と同形のを仁多方言と古代語との共通祖語の形(祖形)とすることができ、その祖形(=形式としては古代語と同じ)からの変化によって仁多方言の形式が派生したものとして考えることができる。

4 r 脱に伴う特殊変化

3つ目の音変化として、出雲方言で広く認められる*(C)Vr{i/u} > V: という変化と、それに関連する仁多方言における独自の音変化について述べる。

仁多方言を含む出雲方言では広く、*(C)Vr{i/u} > (C)V: という変化が起こったと考えられる(以下、これを **r** の隠在化と呼ぶ)。例えば、to:「鳥」(*tori), ha:「春」(*haru), argo「蟻」(*arigo) などである。「鳥」「春」などの例における古代語との比較からも、この音変化が出雲方言の先史において起こったことは明らかであろう。また、以下のような交替現象からも、当該の音変化が出雲方言に起こったことは認められるものと考えられる。

3) nokor-「残る」と kak-「書く」の活用 (NPST: 非過去, NEG: 否定)

- noko:「残る-NPST」; nokor-an「残る-NEG」
- kak-u「書く-NPST」; kak-an「書く-NEG」

ただ、仁多方言では、以下に示すように、*Cur{i/u} > C^(w)a:, *Cir{i/u} > Cja:, *(C)er{i/u} > (C)jae という音変化を経験したと考えられる形式が見られる。以下、この変化を「**r** 脱に伴う特殊変化」と呼ぶ(この時の C は任意の子音。廣戸 1950 も参照)。

4) r 脱に伴う特殊変化の例

(a) *Cur{i/u} > C^(w)a:

- k^wa:ma「車」; ϕ a:「降る」

(b) *Cir{i/u} > Cja:

- kja: 「霧」; mja: 「見る」; nja: 「煮る」
- (c) *(C)er{i/u} > (C)jae
- cae 「芹」; jae 「襟」; negjae 「逃げる」

つまり、仁多方言においては、先に述べた出雲方言における*(C)Vr{i/u} > (C)V:が、このままの形で起きるのは、*(C)Vr{i/u}におけるVがa, oの場合に限られる、ということになる。

5 3つの音変化の相対年代

以上述べたように仁多方言では、その先史において(1)中舌母音化、(2)母音の低下、さらに(3)rの隠在化とr脱に伴う特殊変化が起こったと考えられる。以下では、この3つの音変化の相対年代について検討する。

5.1 「rの隠在化・r脱に伴う特殊変化」と2つの「母音の低下」

「死ぬ」sino: (< sinoru < *sinuru)の例からは、rの隠在化・r脱に伴う特殊変化は、2つの母音の低下のうち少なくとも*u > oという変化よりも後に起こったことが示唆される。仮に、*u > oという母音の低下が、rの隠在化・r脱に伴う特殊変化の後に起こったとすると、「死ぬ」を意味する語は、*sinuru > *sina:という変化を経て、現在観察されないsina:という形式となっていたはずである。なお、古代語「去ぬる」に対応する形式はeno:である。

一方、もう一つの母音の低下*i > eとrの隠在化及びr脱に伴う特殊変化との先後関係は必ずしもはっきりとはしない。ただ、表2の(5)に関連して、(5')nita「煮た」が例外となることを既に指摘した。この動詞の非過去・終止連体形はnja:であり、njae「寝る」と区別される。この事実から、発表者は、(5')nita「煮た」が例外となっているのは、*i > eよりも前にrの隠在化及びr脱に伴う特殊変化が起こった結果、その後に*i > eという変化が起こったにも拘らず、nja:「煮る」とnjae「寝る」という対立の存在を背景にして、動詞「煮る」の語幹末母音が*i > eという変化に抗い、nitaとして残ったと考える。

以上より、「rの隠在化・r脱に伴う特殊変化」と2つの「母音の低下」の相対年代は、以下のように考えられる。

5) 「母音の低下」と「rの隠在化・r脱に伴う特殊変化」の相対年代

- (i) 母音の低下 *u > o
- (ii) rの隠在化・r脱に伴う特殊変化
- (iii) 母音の低下 *i > e

5.2 「中舌母音化」と「rの隠在化・r脱に伴う特殊変化」

古代語の「釣る」と「散る」に対応する語は、仁多方言で、どちらもtsa:という形で現れる。また、「する」と「知る／汁」も、仁多方言ではどちらもsa:である。このような事実は、r脱に伴う特殊変化が中舌母音化よりも後に起こったことを示唆する。

仮に、(タ行音の破擦音化は今では考慮外として)中舌母音化よりも前に、r脱に伴う特殊変化(*Cur{i/u} > C^(w)a:と*Cir{i/u} > Cja:)が起こったのならば、「釣る」と「散る」は、tsa:「釣る」とtca:「散る」という、互いに異なる形で現れるはずである。「する」と「知る／汁」も、前者がsa:, 後者がca:という形式で現れるはずである。

「釣る」と「散る」、あるいは、「する」と「知る／汁」は、まずtsiru ~ teiru, あるいは、siru ~ ciruとなって、それぞれ同一形式になった後、r脱に伴う特殊変化を被ったことになる。つまり、r脱に伴う特殊変化には、既に挙げた3つのタイプのみならず、以下のような*Cir{i/u} > Ca:という変化もあったということになる。

6) *Cir{i/u} > Ca:の例

- *tsiri > tsa: : tsa: 「釣り」, tsa:men 「ちりめん」
- *siri > sa: : sa: 「尻」, sa:mi 「すり身」
- *ziru > za: : keza: 「削る」

結局、r の隠在化と r 脱に伴う特殊変化は中舌母音化の後に起こったと考えられる。

5.3 「中舌母音化」と2つの「母音の低下」の相対年代

表2からは、m, n の後における2つの「母音の低下」は、凡そ並行的な関係にあると思われる。つまり、*mu > mo/_CV (V は a 以外) であるならば、同様に *nu > no/_CV (V は a 以外) と考えられる。その後、*i と *u の中舌母音化により、*mu, *mi > mi, *nu, *ni > ni という変化が起こった。さらに、ni > ne (無条件変化)、mi ~ me/_CV (V は a 以外) という変化が起こり、現在の状態に至ったものとする。

表2の(6')neka「糠」は、唯一の例ではあるが、*nu > *ne/_Ca という変化の結果のように見える。しかし、上記の発表者の考えによれば、*nu > *ni/_Ca, ni > ne (無条件変化) という2段階の変化を経て、成立したものと考えられる。そして、そのように考えることによって、m, n の後における2つの「母音の低下」の並行的な関係を矛盾なく説明することもできる。

結局、「中舌母音化」と2つの「母音の低下」の相対年代は、以下の順であったと考えられる。これはここまで議論してきたことと一切矛盾しない。

7) 「中舌母音化」と2つの「母音の低下」の相対年代

- (i) 母音の低下 *u > o
- (ii) 中舌母音化
- (iii) 母音の低下 *i > e

5.4 小結

本節の議論をまとめると、「中舌母音化」・2つの「母音の低下」・「r の隠在化・r 脱に伴う特殊変化」は、以下のよ
うな順で起こったと考えられる。なお、それぞれの変化に条件があることに注意をしたい。

8) 「中舌母音化」・2つの「母音の低下」・「r の隠在化・r 脱に伴う特殊変化」の相対年代

- (i) 母音の低下 *u > o
- (ii) 中舌母音化
- (iii) r の隠在化・r 脱に伴う特殊変化
- (iv) 母音の低下 *i > e

6 母音をめぐる音変化と出雲方言の位置付け : kuso: 「糞」をめぐって

上記でまとめたような順で「中舌母音化」・2つの「母音の低下」・「r の隠在化・r 脱に伴う特殊変化」といった変化が起こったと考えれば、現代仁多方言の形式は古代語の形式から変化したものとして、基本的に矛盾なく説明できる。しかし、実は一見すると例外と思われる形式も幾らか存在する。特に、注目したいのは、出雲方言で広く認められる「糞」を意味する kuso: という形式である。

仮に、上代語の kusuri という形式を出雲方言の祖形とするならば、(9)にまとめた順で4つの変化を経て、仁多方言では kusa: という形で現れるはずである (cf. sa:mi 「すり身」)。しかし、実際に観察されるのは kuso:, あるいは、標準語形の kusuri からの類推によると思われる kusi: という形式である。既に見たように、語頭あるいは m, n, b, j といった子音の後では、*u > o という母音の低下が起こったことが広く認められるものの、古代語の「ス」が仁多方言の so に対応するものは kuso: 「糞」以外に、発表者自身は出会ってない。例えば、neka 「糠」もまた唯一例ではあったが、n と m の後における、2つの母音の低下に見られる並行性によって、その対応の確かさが支えられていた。しかし、「糞」の場合には、そういった並行性を求める相手も見つからない。

発表者としては、比較歴史言語学における原理・原則に則って、対応が異なり、その条件が特定できないものについては、祖形として別の形を再建すべきであるとする。つまり、上代語(古代語)の「ス」は、一般に出雲方言の

si に対応し (ex. sisi「煤」など), 両者の共通祖語の段階において *su であると再建できるが, それと異なる対応を示す「葉」の場合は, それとは違うものを祖語の段階に再建すべきである。発表者は, Pellard (2013) が, 琉球諸方言と上代語との対応に基づき「葉」の日本祖語形を *kusori と再建することを受けて, 出雲方言の kuso:「葉」という形式は, この日本祖語形に遡るものだと考える。つまり, 日本祖語形の *kusori から, (9) にまとめた順で 4 つの変化を被り (実際には (9) の (iii) の変化のみを被る), 現代の kuso: という形式に至ったと考えるのである (Thorpe 1983 も参照)。

服部四郎 (1978-79 など) は, 琉球祖語 (琉球諸方言の共通祖語) の *e と *o のそれぞれ一部が, 奈良時代中央方言 (8c 頃) の i (イ列甲類) と u に対応することを指摘し, その対応に基づき, 日本祖語 (琉球諸方言を含む日本列島で話される諸方言の共通祖語) の段階に半狭母音 *e と *o を再建した。そして, 中央方言は半狭母音の狭母音化 *e > i, *o > u を経験したという仮説を示した。その後, Pellard (2013) はその再建の根拠となる対応例を追加し, 服部説を補強した。ただ, Pellard (2013) 等の先行研究で提示される日本祖語 *o を保存しているように見えるものが出雲方言に見られても, 当該方言の音韻体系に関する共時・通時両面からの精密な記述がなければ, それが方言内部で二次的に生じた可能性を排除はできない。

本発表では, *u > o という変化を含め, 出雲方言における母音をめぐる種々の音変化について, それらが起こった条件を詳細に検討した。それによって, kuso: の第二音節の母音 o は, 二次的に生じた蓋然性が低く, 日本祖語の *o を保存するものだという結論に至った。つまり, この kuso: という形式は, 中央方言が経験した狭母音化 *o > u を出雲方言が経験しなかったことを示唆するのである。

このことは同時に, 出雲方言の音韻体系に関する共時・通時両面からの精密な記述が, 日琉諸方言を対象とする比較歴史言語学的研究に貢献し得ることを示す。従来の日本祖語形再建の現場において, その比較の対象となってきたのは, 上代語, 琉球諸語が主であり, 一部上代東国方言や八丈方言が用いられる程度であった。仮に, 出雲方言が狭母音化 *o > u を経験しなかった方言であることが確かであれば, その精密な記述が, 上代語・琉球諸語・八丈方言などだけでは結論の出なかった問題に, 新たな示唆を与える可能性もある。

7 今後の課題と展望

従来, 本土諸方言は中央方言に侵食され, 比較言語学的研究に資するところはほぼないものと考えられてきた。そのため, 諸方言と中央方言の間の音対応について十分な検討がなされず, 中央方言との発音の異なりは「訛り」として等閑に付されることもあった。本研究は, 出雲方言の音韻体系に関する共時・通時両面からの精密な記述が, 日琉諸方言を対象とする比較歴史言語学的研究に貢献し得ることを示すもので, 当該分野の今後の発展に繋がるものである。

ただ, 残された課題も多い。何よりも大きな課題は, 表 4 の (9) 及び (10) (10') の対応の不規則性に関する説明が不十分なまま残ったように, 例外的な対応を示すものが少なからずあることである (ex. ogoisi「鷺」, orosi「漆」)。一部は標準語の影響や周辺方言との接触に起因するものと考えられるものの, 詳細な検討には至っていない。この問題を解決するためには, 出雲地域の他方言や, 西伯や隠岐の島諸方言との比較研究及び「比較言語学的観点からする詳しい言語地理学的研究」(服部 1978-79) が必要であると考えている。今後の課題としたい。

【参考文献】

- 服部四郎 (1978-79) 「日本祖語について (1-22)」『言語』7(1-3; 6-12); 8(1-12) [服部四郎 著／上野善道 補注 (2018) 『日本祖語の再建』東京：岩波書店. に所収]
- 平子達也 (2017) 「出雲地域 7 方言の名詞アクセント資料——1~3 モーラ語——」『実践國文学』91: 320-278.
- 廣戸惇 (1950) 『山陰方言の研究』島根県立教育研修所.
- Pellard, Thomas (2013) 'Ryukyuan perspectives on the Proto-Japonic vowel system' In: Frellesvig, Bjarke & Sells, Peter (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 20: 81-96, University of Oxford - University of London. Stanford: CSLI Publications.
- Thorpe, M.L. (1983) *Ryukyuan language history*. Ph.D. thesis, University of Southern California.